『比較論理学研究』第7号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2009)

Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究（5）

間瀬　忍

本稿によって、18 世紀のパーニニ文法家ナーゲーシャ・バッタ（Nāgeśa Bhaṭṭa）が著した『パリバーシェーンドゥシェーカラ』(Paribhāṣenduśekhara) の解釈規則 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge（以下 antaraṅga 解釈規則と表記）に関する一連の翻訳研究は完結をみる[1]。

翻訳箇所においてナーゲーシャは以下の二つの事柄を論じている。

(1) 世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則の働き

(2) antaraṅga 解釈規則の有効範囲

世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則は、P.6.4.132 における *ūṬH* によって論理的に確立される antaraṅga 解釈規則とは働きを異にする。その独自の機能が明らかにされる。また、antaraṅga 解釈規則は普遍妥当性を持たず、適用範囲も制限的であることも明らかにされる。

4. 世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則

【4.1. 世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則：導入部】

nanv evam asusruvad ity atra laghūpadhaguṇād uvaṅo 'lpanimittatvābhāvād uvaṅ na syād iti cet / na / tatrāntaḥkāryatvarūpāntaraṅgatvasattvāt / antaḥkāryatvaṃ ca pūrvopasthitanimittakatvam aṅgaśabdasya nimittaparatvāt /

【反論】[それではもし] このように [少ない根拠を期待するものが antaraṅga であるとするなら] *asusruvat*（「流した」*sru-i*, 3rd sg. aorist P.）というこの［事例］においては、[P.7.3.86 による］「upadhā」の「laghu」に対する「guṇa」代置より、[P.6.4.77 による］*u* に対する *uvAṄ* 代置の方が根拠が少ないということはないから、[P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置は P.7.3.86 による「guṇa」代置に対して antaraṅga とは認められず、よって]*uvAṄ* 代置は起こらないであろう。

【答論】そのように言ってはならない。なぜなら、その［P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置］には操作の内部性（antaḥkāryatva）という antaraṅga 性が存在するからである。そして操作の内部性とは、操作の根拠が［他の操作の根拠に］先立って想起されるということ（pūrvopasthitanimittakatva）である。*aṅga* という語は根拠（nimitta）を意図するからである[2]。

[1] 間瀬 [2006]、間瀬 [2007]、間瀬 [2008]、間瀬 [2009]

[2] 【本文の解説】反対論者は、*asusruvat* という事例において同時に適用可能である P.7.3.86 による「guṇa」代置と P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置に関して、P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置が antaraṅga であることを否定している。なぜなら、P.7.3.86 による「guṇa」代置の根拠の数と P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置の根拠の数を比較した場合、P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置の根拠の数が少ないということはないからである。

この主張は、ナーゲーシャがすでに否定している（間瀬 [2006: 94. 5–39]）、ある操作 A の根拠の数が他の操作 B の根拠の数より少ないとき、操作 A は操作 B に対して antaraṅga であるという見解に沿って述べられている。

このような反対論者の主張に対してナーゲーシャは、P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置が P.7.3.86 による「guṇa」代置に対して antaraṅga であるのは「操作の内部性」(antaḥkāryatva) によると述べている。

ナーゲーシャによれば、「操作の内部性」とは、操作の根拠が他の操作の根拠に先立って想起されることである。つまり、操作 A の操作の根拠が操作 B の操作の根拠より先立って想起されるとき、操作 A は操作 B に対して antaraṅga である。antaraṅga の aṅga とは根拠 (nimitta) の

【4.2. 世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則の必要性】

idam antaraṅgatvaṃ lokanyāyasiddham iti manuṣyo 'yaṃ prātar utthāya śarīrakāryāṇi karoti tataḥ suhṛdāṃ tataḥ saṃbandhinām / arthānām api jātivyaktiliṅgasaṃkhyākārakāṇāṃ bodhakramaḥ śāstrakṛtkalpitas tatkrameṇaiva ca tadbodhakaśabdaprādurbhāvaḥ kalpita iti tatkrameṇaiva tatkāryāṇīti paṭvyetyādāv antaraṅgatvāt pūrvaṃ pūrvayaṇādeśaḥ parayaṇādeśasya bahiraṅgatayāsiddhatvād ity anenācaḥ parasmin (P.1.1.57) iti sūtre bhāṣye spaṣṭam //

この antaraṅga 性は世間的道理によって確立される。このことは、P.1.1.57 acaḥ parasmin pūrvavidhau というスートラに対する Bhāṣya における次の言明から明らかである[3]。

ことである。そして、操作が antaraṅga であるか bahiraṅga であるかは根拠の内部性によって決定される。したがってナーゲーシャの見解ではこのような antaraṅga 性も認められなければならない。

asusruvat の派生を具体的に見てみよう。

【*asusruvat* の派生】

(1)						*sru*	+	*ṆiC*				P.3.1.26
(2)						*sru*	+	*i*	+		*lUṄ*	P.3.2.110
(3)						*sru*	+	*i*	+		*tiP*	P.3.4.78
(4)						*sru*	+	*i*	+		*t*	P.3.4.100
(5)	*aṬ*	+				*sru*	+	*i*	+		*t*	P.6.4.71
(6)	*a*	+				*sru*	+	*i*	+	*ClI* +	*t*	P.3.1.43
(7)	*a*	+				*sru*	+	*i*	+	*CaÑ* +	*t*	P.3.1.48
(8)	*a*	+				*sru*	+	*ϕ*	+	*a* +	*t*	P.6.4.51
(9)	*a*	+		*sru*	+	*sru*	+	*ϕ*	+	*a* +	*t*	P.6.1.11
(10)	*a*	+		*su*	+	*sru*	+	*ϕ*	+	*a* +	*t*	P.7.4.60
(11)	*a*	+		*su*	+	*sruv*	+	*ϕ*	+	*a* +	*t*	P.6.4.77
		asusruvat										
*(11)	*a*	+		*su*	+	*sro*	+	*ϕ*	+	*a* +	*t*	P.7.3.86

［派生説明］

(1) の段階で P.3.1.26 により動詞語根 *sru*（「流れる」）に使役を意味する*ṆiC* が導入される。(2) の段階で P.3.1.32 により「dhātu」と呼ばれる動詞語根 *sru-i* に P.3.2.110 によりその動詞語根が表示する流す行為が過去の属することを表示するために *lUṄ* が導入される。(3) の段階で P.3.4.78 により *lUṄ* に三人称単数「parasmaipada」の代置要素である *tiP* が代置される。(4) の段階で P.3.4.100 により *ti* の *i* が脱落する。(5) の段階で P.6.4.71 により動詞語根 *sru-i* に附加辞 *aṬ*が起こる。(6) の段階で P.3.1.43 により動詞語根 *sru-i* に *ClI* が起こる。(7) の段階で P.3.1.48 により *ClI* に *CaÑ*が代置される。(8) の段階で P.6.4.51 により*ṆiC*（*sru-i* の *i*）が脱落する。(9) の段階で P.6.1.11 により *sru* の重複が起こる。(10) の段階で P.7.4.60 により、最初の子音である *s* は残存し、*r* は脱落する。(11) の段階で P.6.4.77 により *u* で終わる「aṅga」である動詞語根 *sru* の *u* に *uvAṄ* が代置される。

この派生の (11) の段階で P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置操作と P.7.3.86 による「guṇa」代置操作が適用可能である。前者の根拠（aṅga）は *sruv*+*ϕ*+*a* の *a* であり、後者の根拠は *t* である。したがって、前にある要素である *a* を根拠する P.6.4.77 による *uvAṄ* 代置操作の方が、根拠が先立って想起されるから、P.7.3.86 による「guṇa」代置に対して antaraṅga である。

【関連規則】

P.3.1.26 hetumati ca //（「使役者である行為主体の働きが表示されるべきとき動詞語根の後に*ṆiC* が起こる」）

P.3.1.32 sanādyantā dhātavaḥ //（「*saN* 等の接辞で終わる項目は「dhātu」（動詞語根）と呼ばれる」）

P.3.2.110 luṅ //（「過去に属する行為を表示する動詞語根の後に *lUṄ* 接辞が起こる」）

P.3.4.78 tiptasjhisipthasthamibvasmastātāṃjhathāsāthāṃdhvamiḍvahimahiṅ //（「*L* 音の代わりに、*tiP*、*tas*、*jhi*、*siP*、*thas*、*tha*、*miP*、*vas*、*mas*、*ta*、*ātām*、*jha*、*thās*、*āthām*、*dhvam*、*iṬ*、*vahi*、*mahiṄ* という代置要素が起こる」）

P.3.4.100 itaś ca //（「*Ṅ* を it として持つ *L* 音に代置される *i* 音で終わる「parasmaipada」接辞の最終要素にゼロが代置される」）

P.6.4.71 luṅlaṅlṛṅkṣv aḍ udāttaḥ //（「*lUṄ*, *lAṄ*, *lṆ* が後続するとき、「aṅga」に附加辞 *aṬ*が起こり、その［*aṬ*］は「udātta」アクセントをとる」）

P.3.1.43 cli luṅi //（「*lUṄ* が後続するとき動詞語根の後に *ClI* 接辞が起こる」）

P.3.1.48 ṇiśridrusrubhyaḥ karttari caṅ //（「行為主体を表示する *lUṄ* が後続するとき、*Ṇi* で終わる動詞語根、*śri*（「赴く」）、*dru*（「走る」）、*sru*（「流れる」）［というこれらの動詞語根］に後続する *ClI* に *CaṄ* が代置される」）

P.6.4.51 ṇer aniṭi //（「附加辞 *iṬ*で始まらない「ārdhadhātuka」が後続するとき*Ṇi* の脱落が起こる」）

P.6.1.11 caṅi //（「*CaṄ* が後続するとき、「abhyāsa」ではない動詞語根の一部である、母音を一つ有する先頭要素、第一要素である母音に後続する第二要素は重複される」）

P.7.4.60 halādiḥ śeṣaḥ //（「「abhyāsa」の最初の子音は残り、他の子音は脱落する」）

P.6.4.77 aci śnudhātubhruvāṃ yvor iyaṅ uvaṅau //（「母音で始まる接辞が後続するとき、「aṅga」である*Śnu* 接辞で終わる項目、*/i/*音と*/u/*音で終わる動詞語根、*bhrū*（「眉」）の最終要素である*/i/*音と*/u/*音にそれぞれ *iyAṄ* と *uvAṄ* が代置される」）

P.7.3.86 pugantalaghūpadhasya ca //（「「sārvadhātuka」と「ardhadhātuka」が後続するとき *pUK* を最終要素として持つ「aṅga」と「upadhā」が「laghu」である「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」が起こる」）

[3]MBh on P.1.1.57 (I.145,22–28): nanu ceyam api kartavyāsiddhaṃ bahiraṅgalakṣaṇam antaraṅgalakṣaṇa iti / bahuprayojanaiṣā paribhāṣā / avaśyam eṣā kartavyā / sā cāpy eṣā lokataḥ siddhā / katham / pratyaṅgavartī loko lakṣyate / tadyathā / puruṣo 'yaṃ prātar utthāya yāny asya prati śarīraṃ kāryāṇi tāni tāvat karoti tataḥ suhṛḍāṃ tataḥ saṃbandhinām / prātipadikaṃ cāpy upadiṣṭaṃ sāmānyabhūte 'rthe vartate / sāmānye vartamānasya vyaktir upajāyate / vyakta-

「［世間では例えば］この人間は朝起きて先ず［自己の］身体に関してなすべきことをなし、次に友達達に関してなすべきことをなし、それから親戚に関してなすべきことをなす［と言われる］。

［文法学の領域では］意味についても文法規則の定式者は、種（jāti）、個物（vyakti）、性（liṅga）、数（saṃkhyā）、kāraka が順々に理解されること（bodhakrama）を想定し、さらにまさにその［理解の順序］でそれら［の意味］を理解せしめる語が生起すると想定する。したがって、まさにそれら［語］の順序に従ってそれら［の語］に関わる文法操作［が起こるべきである］から、*paṭvyā* 等においては、antaraṅga であるから先ず先行要素に対する *yaṆ*代置が起こる。なぜなら、後続要素に対する *yaṆ*代置は bahiraṅga であり、したがって asiddha であるからである」[4]

【4.3. 世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則の働き】

tad api yugapatprāptau pūrvapravṛttiniyāmakam eva yathā paṭvyety atra padasya vibhajyānvākhyāne na tu jātasya bahiraṅgasya tādṛśe 'ntaraṅge 'siddhatāniyāmakaṃ prāguktalokanyāyena tathaiva lābhād iti vāha ūṭh (P.6.4.132) sūtre kaiyaṭe spaṣṭam / ata eva vāyvor ityādau vali lopo yaṇaḥ sthānivattvena vārito bhāṣyakṛtā // krameṇānvākhyāne tūktodāharaṇe pūrvapravṛttikatvam antaraṅgatvaṃ bahiraṅgasyāsiddhatvam api nimittābhāvād aprāptirūpaṃ bodhyam //

また、その［操作の内部性］は、［二つの操作が］同時に結果するとき、［その根拠が先に想起される操作の］先行適用（pūrvapravṛtti）を決定するものに他ならない。例えば、*paṭvyā* というこの［事例］に関して、「pada」を構成要素に分解して説明する（vibhajyānvākhyāna）場合の［操作の内部性がそうである］。

しかしながら、［その操作の内部性は］すでに生じている bahiraṅga のそのような［その根拠が先に想起される］antaraṅga に対する asiddha 性を決定するものではない。なぜなら、上述の世間的道理によって、［直後に bahiraṅga が結果するならば、その bahiraṅga は］まさにその通りに

---

sya sato liṅgasaṃkhyābhyām anvitasya bāhyenārthena yogo bhavati / yathaiva cānupūrvyārthānāṃ prādurbhāvas tathaiva śabdānām api tadvat kāryair api bhavitavyam //

[4]【本文の解説】ナーゲーシャによれば、antaraṅga 解釈規則は「操作の内部性」に基づいて操作の適用順序を決定するものとしても機能する。この場合の antaraṅga 解釈規則は P.6.4.132 の*ūṬH* によって論理的に確立されるものではなく、世間的道理を根拠とする。

ナーゲーシャはこの解釈の根拠をパタンジャリの言明に求めている。パタンジャリによれば antaraṅga 解釈規則は世間的道理によっても確立される。その世間的道理とは、「男は朝起きて自分の体になすべきことをし、友達になすべきことをし、親戚になすべきことをする」すなわち、なすべきことは近いところから順番になされるべきであるというものである。

この世間的道理は、文法学においては操作の適用順序が適用対象である要素の生起の順序によって決定されるということを確立する。パタンジャリは、パーニニ文法学の派生組織においてパーニニは名詞語幹（「prātipadika」）が名詞接辞（*sUP*）を後続する語形（subanta）から複数の意味が一定の順序で理解されることを想定し、その意味の理解の順序に応じてその名詞接辞で終わる項目の構成要素が生起すると想定していると考える。一般に、名詞接辞で終わる項目からはその複数の意味の理解は、種、個物、性、数、kāraka の順に起こる。そしてこの意味の理解の順序に応じて名詞接辞で終わる項目を構成する要素が生起する。*paṭvyā*（*paṭvī*「賢い女性によって」、inst. sg. f.）の派生を例に説明しょう。

【*paṭvyā* の派生】

(1) *paṭu* + *ṄīṢ* + *Ṭā*
(2) *paṭv* + *ī* + *ā* P.6.1.77
(3) *paṭv* + *y* + *ā* P.6.1.77
paṭvyā
*(2) *paṭu* + *y* + *ā* P.6.1.77

種、個物の意味を表示するものとしてまず名詞語幹 *paṭu*（「賢い（もの）」）が生起する。次に生起するのは女性性を表示する女性接辞*ṄīṢ*である。そして最後に数および手段あるいは行為主体という kāraka を表示する名詞接辞*Ṭā* が生起する。問題の世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則によれば、文法操作は、名詞語幹に関わる操作、女性接辞に関わる操作、名詞接辞に関わる操作の順で起こる。この場合、先行する操作が後続する操作に対して antaraṅga となる。先行する操作はその根拠が先立って想起されるものである。

さて、(2) の段階で二つの操作が適用可能である。P.6.1.77 による *paṭu* の *u* に対する *yaṆ*代置と P.6.1.77 による*ṄīṢ*に対する *yaṆ*代置である。前者の根拠は*ṄīṢ*であり、後者の根拠は*Ṭā* である。*ṄīṢ*の生起は*Ṭā* の生起に先行する。したがって、*ṄīṢ*を根拠とする P.6.1.77 による *patu* の *u* に対する *yaṆ*代置が P.6.1.77 による*ṄīṢ*に対する *yaṆ*代置に対して antaraṅga ということになる。この場合、antaraṅga 解釈規則により bahiraṅga である P.6.1.77 による*ṄīṢ*に対する *yaṆ*代置は P.6.1.77 による *patu* の *u* に対する *yaṆ*代置に対して存在しない（asiddha）とみなされるから、P.6.1.77 による *patu* の *u* に対する *yaṆ*代置が優先適用されることになる。

【関連規則】

P.6.1.77 iko yaṇ aci //（「母音が後続するとき、*iK* の代わりに *yaṆ*代置が起こる」）

獲得されるからである。このことは、P.6.4.132 vāha ūṭh というスートラに関するカイヤタ［の注釈］において明らかである。

まさにこのような理由から、*vāyvoḥ*など［の事例］に関して、［P.6.1.66 lopo vyor vali による］*vaL*［である *v* 音］が後続するときの *y* 音脱落は *yaṆ*［である *v* 音］が原要素［である *u* 音］として扱われること（sthānivattva）で回避されることが P.1.1.57 acaḥ parasmin pūrvavidhau というこの［スートラ下で］バーシュヤの作者によって［述べられている］[5]。

一方、段階的説明（krameṇānvākhyāna）の場合、［*paṭvyā* といった］上述の事例に関しては、先行適用性（pūrvapravṛttikatva）もまた antarańga 性であり、bahirańga の asiddha 性も根拠の非存在に基づく［操作の］非結果（aprāpti）を本質とすると理解すべきである[6]。

[5]MBh on P.1.1.57 (I.147.17–18): iha tāvat paṭvyā mṛdvyeti yathā sthānini yaṇādeśo bhavaty evam ādeśe 'pi bhavati / ihedānīṃ vāyvoḥ adhvaryvor iti yathā sthānini yalopo na bhavaty evam ādeśe 'pi na bhavati //（「まずもって、次の事例すなわち *paṭvyā*、*mṛdvyā* においては原要素があるときと同じように代置要素があるときにも *yaṆ*代置が起こる。次に以下の事例すなわち *vāyvoḥ*、*adhvaryvoḥ*においては原要素があるときと同じように代置要素があるときにも *y* 音脱落は起こらない」）

[6]【本文の解説】ここにおいてナーゲーシャは以下の二点を明示している。

(1) 世間的道理によって確立される antarańga 解釈規則は antarańga より先に適用された bahirańga 規則の結果を阻止しない。

(2) 世間的道理によって確立される antarańga 解釈規則は krameṇānvākhyāna の場合と vibhajyānvākhyāna の場合とでは働きが異なる。

以下に各点を説明しよう。

I.

P.6.4.132 における*ūṬH* によって確立される antarańga 解釈規則によれば次の効果が得られる。

(1) antarańga 操作と同時に適用される bahirańga 操作が存在しないものとみなされる。

(2) すでに適用された bahirańga 操作は適用されなかったものとみなされる。

しかしながら、世間的道理によって確立される antarańga 解釈規則によれば (1) の効果だけしか得られない。

カイヤタは次のように述べている。

Pradīpa on MBh ad P.6.4.132 (IV. 778. 18-20): nanu naitaj jñāpakasādhyam, lokataḥ siddhatvāt / pratyańgavartī hi lokaḥ / naitad asti / yatra yugapad antarańgabahirańgayoḥ prāptis tatra laukikanyāyāśrayaṇād bhavatv antarańgam / iha tu bahirańganimittam antarańgam iti laukikanyāyānavatāraḥ //（「【反論】この解釈規則は指標（jñāpaka）によって確立されえない。なぜなら世間的に確立されることだからである。実に世間の人は手近なところから手を染める。【答論】このようなことはない。同時に antarańga と bahirańga の両操作が適用可能なとき世間的な道理に依拠することで antarańga が起きる。しかしながらこの［*viśvauhas* の事例］の場合、antarańga は bahirańga を根拠として起きるのだから世間的道理は導入されない」）

5. 先行する場所に起こる操作が antarańga であることの否定

yat tv evaṃrītyā pūrvasthānikam apy antarańgam iti tac cintyam / srajiṣṭha ityādau vinmator luki ṭilopasyāpavādavinmator lukpravṛttyā

世間的道理によって確立される antarańga 解釈規則に (2) の効果はないということは、*vāyvoḥ*（*vāyu*「風」、gen. du. m.）の事例によって証明される。

【*vāyvos* の派生】

(1) *vāyu* + *os* P.4.1.2
(2) *vāyv* + *os* P.6.1.77
vāyvos
*(3) *vāv* + *os* P.6.1.66

［派生説明］

(1) の段階で P.4.1.2 により *vāyu* に双数属格接辞である *os* が導入される。(2) の段階で P.6.1.77 により *u* に *yaṆ* である *v* が代置され、*vāyvos* が派生される。（*-s* → *-rU* (P.8.2.66) → *-ḥ* (P.8.3.15)）

この派生の (2) の段階で *vāyu* の *u* に *v* が代置された後、*(3) で示したように、P.6.1.66 で規定されている *vāyv* の *y* 音脱落が適用可能となる。しかし、この派生で P.6.1.66 による *y* 音脱落が適用されれば、*vāyvos* は派生できなくなる。

もし世間的道理によって確立される antarańga 解釈規則に (2) の効果があるならば、P.6.1.66 が適用できない理由を次のように説明できるはずである。

P.6.1.77 による *v* 音代置の根拠は *os* の *o* であり、P.6.1.66 による *y* 音脱落の根拠は *v* である。*o* は *v* に先行して生起する。したがって、P.6.1.77 による *v* 音代置操作は P.6.1.66 による *y* 音脱落操作に対して bahirańga である。この場合、(2) の効果を有する antarańga 解釈規則により、P.6.1.77 による *v* 音代置操作は適用されなかったものとみなされ、P.6.1.66 による *y* 音脱落の操作に適用機会は生じない。

しかしながら、パタンジャリは *vāyvos* の派生に関し、*y* 音脱落の適用が *v* を原要素の *u* として扱うこと（sthānivadbhāva）によって回避されることを指摘している。ナーゲーシャによれば、このことはパタンジャリの見解では世間的道理によって確立される antarańga 解釈規則は (2) の効果をもたないということを示す。

【関連規則】

P.4.1.2 svaujasamauṭchaṣṭābhyāṃbhisṅebhyāṃbhyasṅasibhyāṃbhyasṅasosāmṅyossup //（「*Ṅī*を最終要素とするものあるいは*āP* で終わる項目あるいは「prātipadika」の後に *sU* などの接辞が起こる」）

P.6.1.77 iko yaṇ aci //（「母音が後続するとき、*iK* の代わりに *yaṆ*代置が起こる」）

P.6.1.66 lopo vyor vali //（「*vaL* が後続するとき、*v* 音と *y* 音が脱落する」）

II.

jātipakṣāśrayaṇena vāraṇaprayāsasya prakṛtyaikāc (P.6.4.163) iti sūtraprayojanakhaṇḍanāvasare bhāṣyakṛtkṛtasya naiṣphalyāpatteḥ / tvadukta-rītyā vinmator luko bahiraṅgāsiddhatvenānāyāsatas tadvāraṇāt / bhāṣya īdṛśarītyā bahiraṅgāsiddhatvasya kvāpy anāśrayaṇāc ca / paribhāṣāyām aṅgaśabdasya nimittaparatvāc ca //

しかしながら、次の考えは一考を要する。「同様の道理で、先行する場に起こる［操作］(pūrvasthānika) も［後続する場に起こる操作に対して］antaraṅga である」

なぜならば、Bhāṣya の作者が P.6.4.163 prakṛtyaikāc[7] というスートラの目的を否定する際になしている以下の努力が無益なものとなってしまうからである。

［パタンジャリは、］*srajiṣṭha*（「最も優れた花輪所有者」）など［の事例］において、［P.5.3.65 vinmator luk により *sragvat*、*sragvin*（「花輪を身につけている者」）の接辞］*matUP* と *vinI* に「luk」が代置されてそれらの脱落が起こった後、［P.6.4.155 ṭeḥ によって再び適用可能となる「ṭi」である *sraj* の *aj* の脱落を］普遍指示論 (jātipakṣa) を認めることによって［P.6.4.155 の］「ṭi」に対して例外規則である［とみなした］P.5.3.65 の適用によって回避しようとしている[8]。

次に、語の派生を構成要素に分解して説明する場合 (vibhajyānvākhyāna) と構成要素の導入にあわせて段階的に説明する場合 (krameṇānvākhyāna) の世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則の働きの違いを説明する。

vibhajyānvākhyāna は、最初に語の全ての構成要素を並列に並べてそれら全ての要素に対して適用可能な規則を順番に適用していく手法であり、krameṇānvākhyāna は、動詞語根などの要素に、附加辞や接辞などの要素を順番に加え、それらの要素が一つ加えられるたびにその段階で適用できる操作を適用していく手法である。

vibhajyānvākhyāna の観点から *paṭvyā* の派生を示せば以下のようになる。

【*paṭvyā* の派生】

(1) *paṭu* + *ṄīṢ* + *Ṭā*
(2) *paṭv* + *ī* + *ā* P.6.1.77
(3) *paṭv* + *y* + *ā* P.6.1.77
paṭvyā
*(2) *paṭu* + *y* + *ā* P.6.1.77

［派生説明］

(2) の段階で P.6.1.77 により *paṭu* の *u* に *v* が代置される。(3) の段階で P.6.1.77 により *ṄīṢ* に *y* が代置され、*paṭvyā* が派生される。

vibhajyānvākhyāna の場合、*paṭvyā* を構成する全ての要素が並置されるので、並置された要素のそれぞれを根拠とする全ての操作が同時に適用可能となる。そのため、(2) の段階で P.6.1.77 による *paṭu* の *u* に対する半母音代置と P.6.1.77 による *ṄīṢ* に対する半母音代置が同時に適用可能となる。前者の P.6.1.77 による *paṭu* の *u* に対する半母音代置の根拠は *ṄīṢ* であり、後者の 6.1.77 による *ṄīṢ* に対する半母音代置の根拠は *Ṭā* である。P.6.1.77 による *paṭu* の *u* に対する半母音代置は後者に対して antaraṅga である。antaraṅga 解釈規則によって、同時に適用可能な bahiraṅga である *ṄīṢ* に対する半母音代置は存在しないものとみなされる。したがって、*u* に対する半母音代置が適用可能となる。

一方、krameṇānvākhyāna の観点からは *paṭvyā* の派生は次のように示される。

【*paṭvyā* の派生】

(1) *paṭu* + *ṄīṢ* P.4.1.44
(2) *paṭv* + *ī* P.6.1.77
(3) *paṭv* + *ī* + *Ṭā* P.4.1.2
(4) *paṭv* + *y* + *ā* P.6.1.77
paṭvyā

［派生説明］

(1) の段階で P.4.1.44 により *paṭu* の後に女性接辞 *ṄīṢ* が導入される。(2) の段階で P.6.1.77 により *paṭu* の *u* に *v* が代置される。(3) の段階で P.4.1.2 により単数具格接辞である *Ṭā* が導入される。(4) の段階で P.6.1.77 により *ṄīṢ* に *y* が代置され、*paṭvyā* が派生される。

krameṇānvākhyāna の場合、*Ṭā* より先に *ṄīṢ* が導入されるために *paṭu* の *u* に *ī* が後続するという状況が先に生じている。(2) の段階で適用可能な操作は P.6.1.77 による *paṭu* の *u* に対する半母音代置だけである。この規則が適用されたあと、P.4.1.2 によってもう一つの構成要素である *Ṭā* が導入される。この *Ṭā* の導入によって *iK* である *ī* が *aC* である *ā* に後続されるという状況が生じ、P.6.1.77 による *ī* に対する半母音代置が適用されることになる。

この krameṇānvākhyāna 派生法では、*u* に対する半母音代置操作と *ṄīṢ* に対する半母音代置操作が同時に適用可能となることはない。したがって、この派生法においては、先行段階において先に適用される操作が antaraṅga である。antaraṅga 解釈規則は、antaraṅga が適用されるべきとき bahiraṅga はその根拠が存在しないため結果しない（aprāpti）ということを意味する。

【関連規則】

P.4.1.44 voto guṇavacanāt //（「属性表示語（guṇavacana）である「prātipadika」あるいは *u* 音を最終要素として持つ「prātipadika」に女性形で任意に *ṄīṢ* 接辞が起こる」）

P.6.1.77 iko yaṇ aci //（「母音が後続するとき、*iK* の代わりに *yaṆ* 代置が起こる」）

P.4.1.2 svaujasamauṭchaṣṭābhyāṃbhisṅebhyāṃbhyasṅasibhyāṃbhyasṅasosāmṅyossup //（「*Ṅī* を最終要素とするものあるいは *āP* を最終要素とするものあるいは「prātipadika」の後に *sU* などの接辞が起こる」）

[7]P.6.4.163 prakṛtyaikāc //（「*iṣṭhaN*、*imanIC*、*īyasUN* が後続するとき、単音節の「bha」は原形を保持する」）

[8]MBh on P.6.4.163 (III.232.19–21): yat tāvad ucyate katham anyasyocyamānam anyasya bādhakaṃ syād itīdaṃ

なぜなら、あなたの述べた道理に従えば、[P.5.3.65 で規定されている] *vinI* と *matUP* の脱落操作は、bahiraṅga として asiddha であり、容易にその［再び適用可能となる「ṭi」である *sraj* の *aj* の脱落］は回避できるからである。

そして［さらに上述の antaraṅga 観が疑問である理由を述べれば］Bhāṣya のどこにおいてもこのような道理での bahiraṅga の asiddha 性は認められていないからであり、さらに当該解釈規則において *aṅga* という語は根拠を意図しているからである[9]。

tāvad ayaṃ praṣṭavyaḥ / yadi tarhi vinmator lug nocyeta kim iha syād iti / ṭilopa ity āha / ṭilopaś cen nāprāpte ṭilope vinmator lug ārabhyate sa bādhako bhaviṣyati /（「まず、『どうして、一方の［*vinI* と *matUP* で終わる項目］について述べられている［P.5.3.65］が他方［P.5.3.65 が適用された後の項目の「ṭi」の脱落］を阻止し得よう』と主張されているが、この主張についてその主張者は問われるべきである。

【問】その場合［すなわち P.5.3.65 が適用された後］、もし *vinI* と *matUP* の脱落が述べられないとするならば、この［*srajiṣṭha* の事例］において何が起こるのだろうか。

【答】［*vinI* が脱落した後の *sraj* における］「ṭi」の脱落が起こる。

【提案】もし［*sraj* における］「ṭi」の脱落が起こるとするならば、必然的に結果する「ṭi」の脱落の領域に関して P.5.3.65 が定式化されている。その［P.5.3.65 が規定する *vinI* と *matUP* の脱落］は［*vinI* が脱落した後の *sraj* における「ṭi」の脱落を］阻止するであろう」）

[9]【本文の解説】世間的道理によって確立される antaraṅga 解釈規則は、操作の根拠の前後関係に基づいた。ナーゲーシャは関連して、操作の根拠ではなく、操作の対象となる要素の前後関係に基づいた antaraṅga 解釈規則の解釈を否定する。その否定の根拠は *srajiṣṭha* の派生に関するパタンジャリの言明である。まず *srajiṣṭha* の派生を以下に示す。

【*srajiṣṭha* の派生】

(1)	*sraj-sU*	+ *vinI*	P.5.2.121
(2)	*sraj-ϕ*	+ *vin*	P.2.4.71
(3)	*sraj-ϕ*	+ *vin* + *iṣṭhaN*	P.5.3.55
(4)	*sraj*	+ *ϕ* + *iṣṭha*	P.5.3.65
	srajiṣṭha		
*(5)	*sr*	+ *ϕ* + *iṣṭha*	P.6.4.155

［派生説明］

(1) の段階で P.5.2.121 により *sraj-sU* の後に *matUP* 接辞の意味で *vinI* 接辞が導入される。(2) の段階で P.2.4.71 により *sraj* の後の *sU* が脱落する。(3) の段階で P.5.3.55 により *sraj-ϕ+vin* に卓越性接辞 *iṣṭhaN* が導入される。(4) の段階で P.5.3.65 により *vin* が脱落し、*srajiṣṭha* が派生される。

この派生の (4) の段階で二つの操作が適用可能である。その二つの操作とは、P.6.4.155 による *iṣṭhaN* を後続する「bha」である *sraj-vin* の「ṭi」である *-in* の脱落操作と P.5.3.65 による *iṣṭhaN* を後続する *vin* の脱落操作である。この場合、P.5.3.65 による *vin* の脱落は P.6.4.155 による「ṭi」の脱落の例外規則であることから、P.5.3.65 が P.6.4.155 を阻止して優先適用される。そして P.5.3.65 による *vin* の脱落が適用されたあと、*(5) の段階で再び P.6.4.155 による「ṭi」の脱落が *sraj* の「ṭi」である *aj* に関して適用可能となる。パーニニ文法家の一般的な解釈では、この状況で P.6.4.16 が P.6.4.155 による「ṭi」の脱落を阻止し、*sraj* を原形にとどめる。

しかしながらパタンジャリは、P.6.4.163 に依拠することなく P.6.4.155 による「ṭi」の脱落を阻止する方法を提示する。パタンジャリによれば、*vinI* と *matUP* の脱落を規定した P.5.3.65 は、同一環境における「ṭi」の脱落を規定した P.6.4.155 の例外規則である。P.6.4.155 における「ṭi」は普遍を指示するという見解（jātipakṣa）では、この「ṭi」は *sraj-in* の *in* であれ、*sraj* の *aj* であれ、与えられた条件下でのすべての「ṭi」と呼ばれる要素を指示する。したがって、P.5.3.65 は*(5) の段階で適用可能である *sraj* の *aj* の脱落をも阻止する。

さて、antaraṅga 解釈規則において、先行する要素に関する操作が後の要素に関する操作に対して antaraṅga であるとするならば、antaraṅga 解釈規則によって P.6.4.155 による「ṭi」である *aj* の脱落を次のように簡単に回避することができる。

aj は *vin* に先行する。したがって P.6.4.155 による *aj* の脱落操作は、P.5.3.65 による *vin* の脱落操作に対して antaraṅga である。antaraṅga 解釈規則によれば、antaraṅga である操作が適用されるべきとき、bahiraṅga である操作を規定する規則は存在しないもの（asiddha）とみなされる。*aj* の脱落操作が適用されるべきとき、*vin* の脱落操作を規定する規則は存在しないものとみなされる。したがって、*vin* の脱落操作はなく、換言すれば *vin* が存在することになり、*sraj* は *iṣṭhaN* に対して「bha」ではあり得ず、P.6.4.155 による *aj* の脱落操作は適用され得ない。

もしパタンジャリが適用対象である要素の前後関係に基づく antaraṅga 解釈規則を認めていたとするならば、P.5.3.65 を P.6.4.155 に対する例外規則とみなすことによって *sraj* の *aj* の脱落を阻止しようとはしなかったはずである。ナーゲーシャによれば、そのパタンジャリの *sraj* の *aj* の脱落を阻止する試みこそは、彼が適用対象である要素の前後関係に基づく antaraṅga 解釈規則を認めていなかったことの証左である。

6. antaraṅga 解釈規則の有効範囲

【6.1. P.6.3.1 支配下規則における antaraṅga 解釈規則の無効性の言明】

iyaṃ cottarapadādhikārasthabahiraṅgasya nāsiddhatvabodhiketīca ekāco 'm (P.6.3.68) iti sū-

【関連規則】

P.5.2.121 asmāyāmedhāsrajoviniḥ //（「*as* で終わる「prātipadika」の後に、［主格接辞で終わる］*māyā*（「幻」）、*medhā*（「知性」）、*sraj*（「花輪」）の後に、*matUP* 接辞の意味で、*vinI* が起こる」）

P.2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ //（「「dhātu」（動詞語根）という術語で呼ばれるものと「prātipadika」（名詞語幹）という術語で呼ばれるものの内部に含まれる *sUP*

tre bhāṣye pūrvapakṣyuktir iti sā nādartavyā / paraṃtapa ityādāv anusvāre nāsiddhatvaṃ mumas tripādyām tadapravṛtteḥ // navyamate 'pi yathoddeśapakṣāśrayaṇenānyathāsiddhodāharaṇadānena tasya taduktitvam āvaśyakam ity āhuḥ //

ところで次のような主張がある。「この［解釈規則］は、［支配規則 P.6.3.1 alug uttarapade[10] の］*uttarapade*（「複合語後続構成員が後続するとき」）の支配下にある bahirańga が asiddha であることを知らしめるものではない」

しかしこの言明は、P.6.3.68 ica ekāco am pratyayavac ca[11] というスートラに関する Bhāṣya において反対論者の言った言明であるから、顧慮される必要はない[12]。

paraṃtapa（「他者を苦しめる者」）等［の事例］においては、［*param* の *m* 音に P.8.3.23 mo 'nusvāraḥ により］anusvāra（*ṃ*）が代置されるべきとき、［P.6.3.67 arurdviṣadajantasya mum による］附加辞 *mUM* の生起は asiddha ではない。なぜなら、tripādī においてこの［解釈規則］は発効しないからである。［バットージ等の］新文法学派の見解でも、yathoddeśapakṣa を認めることによって［*paraṃtapa* 等は］別様に［すなわち、当該解釈規則は tripādī において発効しないものとして］確立される事例として与えられるものであるから、その［上述の言明］は彼等［反対論者］の言明であることが必然的である。このように［Bhāṣya の定説に従う文法家達は］言う[13]。

【6.2. P.6.4.22 の支配下での antarańga 解釈規則】

ābhīye 'ntarańga ābhīyasya bahirańgasya samānāśrayasya nānenāsiddhatvam asiddhatvād ity

---

に脱落（luk）がおこる」）

P.5.3.55 atiśāyane tamabiṣṭhanau //（「卓越性が表示されるべきとき、「prātipadika」の後に *tamaP* と *iṣṭhaN* が起こる」）

P.5.3.65 vinmator luk //（「*iṣṭhaN* と *īyasUN* が後続するとき、*vin(I)* と *matUP* に「luk」が代置される」）

P6.4.155 ṭeḥ //（「*iṣṭhaN*、*imanIC*、*īyasUN* が後続するとき、「bha」の「ṭi」に「lopa」が代置される」）

[10]P.6.3.1 alug uttarapade //（「［P.6.3.24 vibhāṣā svasṛpatyoḥ までの規則を］*aluk* という項目が支配し、［P.6.3.139 samprasāraṇasya までの規則を］*uttarapade*」という項目が支配する」）

[11]P.6.3.68 ica ekāco 'm pratyayavac ca //（「*iC* で終わる単音節項目は、*kh* を「it」として有する接辞で終わる複合語後続構成員が後続するとき附加辞 *am* を取る。そしてその附加辞 *am* は接辞として扱われる」）

[12]MBh on P.6.3.68 (III.167.11–14): evaṃ tarhy asiddhaṃ bahirańgam antarańge ity asiddhatvād bahirańgalakṣaṇasyāmo 'ntarańgalakṣaṇo lug na bhaviṣyati // naiṣā paribhāṣehottarapadādhikāre śakyā vijñātum / iha hi doṣaḥ syāt / dviṣaṃtapaḥ paraṃtapaḥ / saṃyogāntalopo na syāt / tasmāc śrimanyam iti bhavitavyam //（「【提案】もしそうなら［すなわち、P6.3.68 による附加辞 *am* の生起が P.7.1.33 svamor napuṃsakāt によるその *am* の脱落（luk）を例外規則・一般規則の関係で阻止しないとするなら］、その場合 antarańga 解釈規則によって、bahirańga として特徴付けられる［P.6.3.68 による］附加辞 *am* は asiddha であるから、antarańga として特徴付けられる［その *am* の］脱落（luk）は起こらないであろう。

【反論】この解釈規則は、この *uttarapade* の支配下にある規則（P6.3.2 → P.6.3.139）おいて認識され得ない。実に以下の事例において誤謬が起こることになろう。すなわち、*dviṣaṃtapa*（「敵を苦しめる者」）というこの事例において［P.8.2.23 による］結合子音で終わる項目の最終要素の脱落（lopa）操作が起こらないことになろうし、*paraṃtapa*（「他者を苦しめる者」）においては［P.8.3.23 による *m* 音に対する anusvāra 代置が起こらないことになろう］」）

カイヤタはこの Bhāṣya を次のように説明している。

Pradīpa on MBh ad P.6.3.68 (IV. 640. 13–15): dviṣantapa iti / saṃyogāntalopo na syād iti kecid āhuḥ / etat tu dvayor ekasya vā takārasya śrutau viśeṣānavadhāraṇād anye asādhu manyamānā anusvārāprāptilakṣaṇaṃ doṣam āhuḥ / evaṃ ca parantapa ity api samarthitaṃ bhavati //（「*dviṣantapa* に関して［説明する］。ある者達は、［P.8.2.23 による］最終要素の結合子音の脱落（lopa）は起こらないであろうと主張する。一方、他の者達は、この主張は正しくないと考える。なぜなら、［彼等によれば、*dviṣanttapa* というように］二つの *t* 音が聞かれようと［*dviṣantapa* というように］一つの *t* 音が聞かれようと違いは確定されないからである。したがって彼等は anusvāra の不結果という誤謬を指摘する。そしてこのような場合 *parantapa* という事例もまた確立される」）

なお、P.8.4.59 vā padāntasya により「pada」の最終要素である anusvāra は *yaY* が後続するとき、任意に後続要素との同類音によって代置される。

[13]【本文の解説】P.6.3.1 に対する Bhāṣya において、P.6.3.1 の支配下の規則では antarańga 解釈規則が無効であることが述べられている。ナーゲーシャによれば、この言明は反対論者の言明であると理解されなければならない。なぜなら、反対論者は P.6.3.1 の支配下の規則では antarańga 解釈規則が実効すると考えてこのような無効化の言明をなしているからである。反対論者が彼の言明の正当性を示すための事例として上げられている *paraṃtapa* の派生においては P.6.3.1 の支配下の規則である P.6.3.67 に関連して antarańga 解釈規則の適用可能性を想定することは本来的に不可能である。

【*paraṃtapa* の派生】

asiddhavatsūtre bhāṣye spaṣṭam //

［さらに以下のことが］P.6.4.22 asiddhavad atrā bhāt[14] というスートラに関する Bhāṣya において明らかである。

P.6.4.22 の支配下にある（ābhīya）antaraṅga に対して同一の要素に依拠する同じく P.6.4.22 の支配下にある bahiraṅga は、この［解釈規則］によっては asiddha とはならない。なぜなら、［P.6.4.22 の支配下にある規則（P6.4.23–175）と antaraṅga 解釈規則は相互に］asiddha であるからである[15]。

(1)	+ *tap* + *ṆiC*	P.3.1.26
(2)	+ *tāp* + *i*	P.7.2.116
(3) *para–Ṅas*	+ *tāp* + *i* + *KHaC*	P.3.2.39
(4) *para–ϕ*	+ *tāp* + *i* + *a*	P.2.4.71
(5) *para*	+ *tāp* + *ϕ* + *a*	P.6.4.51
(6) *para*	+ *tap* + *ϕ* + *a*	P.6.4.94
(7) *para*	+ *m* + *tap* + *ϕ* + *a*	P.6.3.67
(8) *paraṃ paraṃtapa*	+ *tap* + *ϕ* + *a*	P.8.3.23

［派生説明］

(1) の段階で P.3.1.26 により使役接辞*ṆiC* が導入される。(2) の段階で P.7.2.116 により *tap* の *a* に「vṛddhi」である*ā* が代置される。(3) の段階で P.3.2.29 により *para* を共起項目（「upapada」）とする *tāp* の後に *KHaC* が起こる。(4) の段階で P.2.4.71 により *para* に後続する名詞接辞*Ṅas* にゼロ（luk）が代置される。(5) の段階で P.6.4.51 により*Ṇi* が脱落する。(6) の段階で P.6.4.94 により *tāp* の*ā* に「hrasva」である *a* が代置される。(7) の段階で P6.3.1 の支配下にあり *uttarapade* が継起する P.6.3.67 により *para* に附加辞 *mUM* が起こる。(8) の段階で P.8.3.23 により「pada」の最終要素である *param* の *m* に「anusvāra」が起こり、*paraṃtapa* が派生される。

この派生の (8) の段階で適用されている P.8.3.23 による「anusvāra」代置は、(7) の段階で適用されている P.6.3.37 による *mUM* の付加に対して antaraṅga である。なぜなら、前者の根拠（aṅga）である *tapa* の *t* は、後者の根拠である *KHaC* に先行する要素であるからである。

antaraṅga 解釈規則が有効であるとしよう。この場合、bahiraṅga である P.6.3.37 による *mUM* の付加が適用された結果である *mUM* は P.8.3.23 による「anusvāra」代置に対して存在しないものと見なされる。したがって、(8) の段階で P.8.3.23 による「anusvāra」代置の適用機会は失われる。

しかしながら、antaraṅga である P.8.3.23 による「anusvāra」代置は、tripādīで規定されている操作である。tripādīで規定されている操作に対して antaraṅga 解釈規則は効力をもたない。antaraṅga 解釈規則の存在は P.6.4.132 の*ūṬH* によって示唆される。この解釈規則は sapādasaptādhyāyīで規定されている解釈規則と見なされる。結果、P.8.2.1 pūrvatrāsiddham によって、yathoddeśa-pakśa ではこの解釈規則に対して tripādīで規定されている規則が存在していないと見なされる。この点は間瀬 [2007: 82. 20–28] に詳論した。

したがって、P.6.3.37 による *mUM* は tripādīで規定されている P.8.3.23 による「anusvāra」代置に対して存在しないもの（asiddha）とはみなされない。無効化の言明をなした反対論者は、tripādīにおいて antaraṅga 解釈規則が無効であることを知らないのである。

【関連規則】

P.3.1.26 hetumati ca //（「使役者である行為主体の働きが表示されるべきとき、動詞語根のあとに*ṆiC* 接辞が起こる」）

P.7.2.116 ata upadhāyāḥ //（「*Ñ*あるいは*Ṇ*を「it」とする［接辞］が後続するとき、「aṅga」の「upadhā」である *a* 音の代わりに「vṛddhi」が起こる」）

P.3.2.39 dviṣatparayos tāpeḥ //（「*dviṣat*（「敵」）と *para*（「他者」）という目的語が「upapada」のとき、*ṆiC* で終わる動詞語根 *tap-i* の後に *KHaC* 接辞が起こる」）

P.2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ //（「「dhātu」（動詞語根）という術語で呼ばれるものと「prātipadika」（名詞語幹）という術語で呼ばれるものの内部に含まれる *sUP* に脱落（luk）がおこる」）

P.6.4.51 ṇer aniṭi //（「附加辞 *iṬ*で始まらない「ārdhadhātuka」が後続するとき*Ṇi* の脱落が起こる」）

P.6.4.94 khaci hrasvaḥ //（「*KHaC* を後続する*Ṇi* が後続するとき「aṅga」の「upadhā」に「hrasva」が起こる」）

P.6.3.67 arurdviṣadajantasya mum //（「「avyaya」を除き、*arus*（「急所」）、*dviṣat*（「敵」）、母音で終わる項目は、*KH* を「it」とする接辞で終わる複合語後続構成員が後続するとき、附加辞 *mUM* を取る」）

P.1.1.47 mid aco 'ntyāt paraḥ //（「*m* を「it」とする項目は、母音のうちの最終母音の後に起こる」）

P.8.2.23 saṃyogāntasya lopaḥ //（「「saṃyoga」を最終要素とする「pada」の［最終要素の］脱落が起こる」）

P.8.3.23 mo 'nusvāraḥ //（「*haL* が後続するとき「pada」の最終要素である *m* の代わりに「anusvāra」が起こる」）

P.7.1.23 svamor napuṃsakāt //（「中性形で *sU* と *am* という名詞接辞に脱落（luk）が起こる」）

[14] P.6.4.22 asiddhavad atrā bhāt //（「P6.4.129 bhasya の支配下にある P.6.4.175 までの規則まで *asiddhavat* が支配する。この支配下にある規則が規定する操作は、この支配下にある他の規則が規定する操作に対して、それらの操作が同一の根拠を有するとき、asiddha なものとして扱われる」）

[15] 【本文の解説】P.6.4.22 asiddhavad atrā bhāt という規則は、P.6.4.23 から P.6.4.175 までの規則（ābhīya）が規定する操作が互いに同一のものに依拠するとき、それらの規則は互いに存在していないかのように見なされることを規定したものである。

ここにābhīya の二つの規則 x と y があり、以下の二条件を満たすとしよう。

(1) 規則 x と y の規定する操作の根拠（āśraya）は同一である。

【6.3. 例外規則に対する antarańga 解釈規則】

evaṃ sici vṛddher yenanāprāptinyāyenāntarańga-bādhakatvam ūlakaṃ na sicy antarańgam astītīko guṇa (P.1.1.3) iti sūtre bhāṣye spaṣṭam //50//

同様に、[次のことも] P1.1.3 iko guṇavṛddhī というスートラに関する Bhāṣya に明らかである。

(2) 規則 x と y の規定する操作の一方を antarańga、他方を bahirańga と特徴付けることができる。

問題は、これら規則 x と y の規定する二操作に関して antarańga 解釈規則は有効であるかどうかということである。

この問題を *papuṣaḥ*（「飲んだ者」*papivas*, acc. pl. m.; *pā*, perfect pt.）の派生に基づいて説明しよう。

【*papuṣaḥ*の派生】

(1)		+ *pā* + *liṬ*		P.3.2.115
(2)		+ *pā* + *KvasU*		P.3.2.107
(3)	*pā*	+ *pā* + *vas*		P.6.1.8
(4)	*pa*	+ *pā* + *vas*		P.7.4.59
(5)	*pa*	+ *pā* + *vas*	+ *Śas*	P.4.1.2
(6)	*pa*	+ *pā* + *uas*	+ *as*	P.6.4.131
(7)	*pa*	+ *pā* + *us*	+ *as*	P.6.1.108
(8)	*pa*	+ *p* + *us*	+ *as*	P.6.4.64
(9)	*pa*	+ *p* + *us*	+ *arU*	P.8.2.66
(10)	*pa*	+ *p* + *us*	+ *aḥ*	P.8.3.15
(11)	*pa*	+ *p* + *uṣ*	+ *aḥ*	P.8.3.60
	papuṣaḥ			

[派生説明] (1) の段階で P.3.2.115 により *lIṬ*が導入される。(2) の段階で P.3.2.107 により *liṬ*に *KvasU* が代置される。(3) の段階で P.6.1.8 により *pā* の重複がおこる。(4) の段階で P.7.4.59 により「abhyāsa」の*ā* に *a* が代置される。(5) の段階で P.4.1.2 により複数目的格接辞*Śas* が導入される。(6) の段階で P.6.4.131 により *vas* の *v* に「samprasāraṇa」である *u* の代置がおこる。(7) の段階で P.6.1.108 により「samprasāraṇa」である *u* と *a* に *u* が唯一代置される。(8) の段階で P.6.4.64 により「aṅga」である *papā* の最終要素である*ā* が脱落する。(9) の段階で P.8.2.66 により *as* の *s* に *rU* が代置される。(10) の段階で P.8.3.15 により *rU* に visarga が代置される。(11) の段階で P.8.3.60 により *vas* の最終要素である *s* に*ṣ*が代置され、*papuṣaḥ*が派生される。

この派生の (6) の段階で適用されている P.6.4.131 による「samprasāraṇa」代置の根拠（aṅga）は *vas* で終わる *papāvas* であるのに対して、(8) の段階で適用されている P.6.4.64 による*ā* の脱落の根拠は「ārdhadhātuka」接辞の *us* である。前者は後者に対して antarańga である。したがって、もし P.6.4.22 の支配下の規則に関して antarańga 解釈規則が有効であるとするならば、P.6.4.131 による「samprasāraṇa」代置が適用された (8) の段階で P.6.4.64 による*ā* の脱落は適用できなくなってしまう。なぜなら、antarańga 解釈規則により，P.6.4.64 による*ā* の脱落が適用されるべきとき，「samprasāraṇa」代置を規定している規則は存在しない (asiddha) ものとみなされ、その代置操作もその結果も存在しないからである。*vas* は母音で始まる「ārdhadhātuka」という P.6.4.64 による*ā* の脱落の根拠足り得ない。

しかし、ナーゲーシャによれば、ābhīya 規則に関して antarańga 解釈規則は効力をもたない。

その理由は以下の通りである。

(1) antarańga 解釈規則はābhīya 規則である。

(2) antarańga 解釈規則が P.6.4.22 の適用を受けるための根拠の同一性（samānāśrayatva）が成立する。

(1) antarańga 解釈規則は、P.6.4.22 の支配下の規則である P.6.4.132 vāha ūṭh の*ūṬH* を指標とするのでābhīya とみなされる。

(2) antarańga である P.6.4.64 による*ā* の脱落操作は、bahirańga である P.6.4.131 による「samprasāraṇa」代置がなければ結果しない。同様に、antarańga 解釈規則も bahirańga である P.6.4.131 による「samprasāraṇa」代置がなければ結果しない。なぜなら、bahirańga がなければ antara nga もなく、antarańga 解釈規則自体が成立しないからである。したがって、antarańga である P.6.4.64 による*ā* の脱落操作と antarańga 解釈規則の間に根拠の同一性が成立し、antarańga 解釈規則にも P.6.4.22 が適用されることになる。

ここでナーゲーシャが依拠しているのは、パタンジャリとカイヤタの次のような言明である。

MBh on P.6.4.22(III.191.6–8): saty antarańge bahirańgaṃ sati ca bahirańge antarańgam / na cātrāntarańgabahirańgayor yugapatsamavasthānam asti / nānabhinirvṛtte bahirańge 'ntarańgaṃ prāpnoti / tatra nimittam eva bahirańgam antarańgasya //（「antarańga があるときに bahirańga があり、bahirańga があるときに antarańga がある。しかしこの [*papuṣaḥ*等の事例において] antarańga と bahirańga の両者が同時に想起されることはない。[よって antarańga 解釈規則は発効しない。] [そして] bahirańga が起こっていないときに antarańga が結果するということはない。その場合［すなわち、antarańga 解釈規則が asiddha であるが故に適用されない場合］、bahirańga は antarańga の根拠に他ならない」）

Pradīpa on MBh 6.4.22(IV.698.11–13): tatra nimittam eveti / paribhāṣāyā asiddhatvād apravṛttāv iti bhāvaḥ / vasusaṃprasāraṇaṃ caikaṃ paribhāṣāyā āllopādīnāṃ cāśraya iti samānāśrayatvād bhavaty asiddhatvaṃ paribhāṣāyāḥ //（「『その場合［すなわち、antarańga 解釈規則が asiddha であるが故に適用されない場合］、bahirańga は antarańga の根拠に他ならない』という Bhāṣya の言明について説明する。『asiddha であるから antarańga 解釈規則が適用されないとき、[bahirańga は antarańga の根拠に他ならない]』ということが意図されている。そして、antarańga 解釈規則と*ā* 音脱落操作は同じ *vas* の「saṃprasāraṇa」代置操作を根拠（āśraya）とするから両者には根拠の同一性があり、したがってこの解釈規則は asiddha である」）

【関連規則】

P.3.2.115 parokṣe liṭ //（「発話している日を除く過去に属し，話者によって目撃されていない行為を表示する動詞

P.7.2.1 sici vṛddhiḥ parasmaipadeṣu [16] などによる「aṅga」に対する「vṛddhi」代置は、「x が必ず結果するときに y の操作が述べられているとするならば、y は x の阻止者である」[17]の論理に基づき、antaraṅga［である P.7.3.84 sārvadhātukārdhadhātukayoḥなど[18]］を阻止するということに基づき、*sIC* が後続するとき antaraṅga は存在しない[19]。

（PIŚ50 了）

[略号及び参考文献]

MBh *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali*, 3vol. Ed. by F. Kielhorn. Forth edition by Abhyankar K. V. Pune:

語根のあとに *lIṬ*接辞が起こる」）

P.3.4.107 kvasuś ca //（「ヴェーダにおいては *lIṬ*の代わりに *KvasU* が起こる」）

P.6.1.8 liṭi dhātor anabhyāsasya //（「*lIṬ*が後続するとき「abhyāsa」でない動詞語根の母音を一つ有する先頭要素の部分、第一要素である母音に後続する第二要素の部分が重複される」）

P.7.4.59 hrasvaḥ //（「「abhyāsa」の母音の代わりに「hrasva」が起こる」）

P.4.1.2 svaujasamauṭchaṣṭābhyāṃbhisṅebhyāṃbhyasṅasibhyāṃbhyasṅasosāmṅyossup //（「*Ṅī*を最終要素とするものあるいは*āP* を最終要素とするものあるいは「prātipadika」の後に *sU* などの接辞が起こる」）

P.6.4.131 vasoḥ saṃprasāraṇam //（「*vasU* を最終要素とする「bha」の代わりに「saṃprasāraṇa」が起こる」）

P.6.1.108 saṃprasāraṇāc ca //（「「saṃprasāraṇa」に母音が後続するとき，先行要素と後続要素の代わりに先行要素が唯一代置される」）

P.6.4.64 āto lopa iṭi ca //（「*iṬ*が後続するとき、あるいは *aC* で始まる *k* あるいは*ṅ* を「it」とする「ārdhadhātuka」が後続するとき、*ā* 音で終わる「aṅga」の［*ā* 音の］脱落（lopa）が起こる」）

P.8.2.66 sasajuṣo ruḥ //（「*s* を最終要素として持つ「pada」と *sajuṣ* というこの「pada」の最終要素の代わりに *rU* が起こる」）

P.8.3.15 kharavasānayor visarjanīyaḥ //（「*khAR* と休止が後続するとき *r* を最終要素として持つ「pada」の最終要素に visarga 代置が起こる」）

P.8.3.60 śāsivasighasīnāṃ ca //（「*śās, vas, ghas* の *s* 音と *iṄ*と *k* 系列音に後続する *s* 音の代わりに*ṣ*音が代置される」）

[16]P.7.2.1 sici vṛddhiḥ parasmaipadeṣu //（「「parasmaipada」を後続する *sIC* が後続するとき、*iK* で終わる「aṅga」に「vṛddhi」が代置される」）

[17]PIŚ57: yena nāprāpte yo vidhir ārabhyate sa tasya bādhako bhavati /

[18]P.7.3.84 sārvadhātukārdhadhātukayoḥ //（「「sārvadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき「aṅga」の［最終要素である *iK* の］の代わりに「guṇa」が起こる」）

[19]【本文の解説】ここでナーゲーシャは、antaraṅga-bahiraṅga 関係と例外規則（apavāda）・一般規則（utsarga）関係との関わりを取り上げている。彼の見解では、antaraṅga は例外規則を阻止する。以下の Bhāṣya の議論が根拠である。

MBh on P.1.1.3 (I. 49.14–19): evaṃ tarhy ācāryapravṛttir jñāpayati na sicy antaraṅgaṃ bhavatīti yad ayam ato halāder laghoḥ ity akāragrahaṇaṃ karoti / kathaṃ kṛtvā jñāpakam / akāragrahaṇasyaitatprayojanam iha mā bhūt akoṣīt amoṣīt / yadi sicy antaraṅgaṃ syād akāragrahaṇam anarthakaṃ syāt / guṇe kṛte laghutvād vṛddhir na bhaviṣyati / paśyati tv ācāryo na sicy antaraṅgaṃ bhavatīti tato 'kāragrahaṇaṃ karoti /（「もしそのようならば、その場合、師の規則定式化の活動は次のこと、すなわち *sIC* が後続するとき antaraṅga 操作は起こらないということを示唆する。なぜなら彼（師）は P.7.2.7 ato halāder laghoḥという規則において *a* 音を言及しているからである。

【問】どのように考えれば示唆していると言えるのか。

【答】［その規則における］*a* 音の言及は次のことを目的としている。すなわち、*akoṣīt*（「彼は引き裂いた」）、*amoṣīt*（「彼は盗んだ」）といったこれらの事例において［「vṛddhi」代置が］起こらないようにするためである。もし、*sIC* が後続するとき antaraṅga 操作が起こるとするならば、*a* 音の言及は無意味となるであろう。いったん「guṇa」代置が適用されれば、もはや「laghu」ではないから「vṛddhi」は起こらないであろう。しかし、師は *sIC* が後続するとき antaraṅga 操作は起こらないと見ている。だから彼は［P.7.2.7 に］*a* 音を言及したのである」）

akoṣīt（「引き裂いた」*kuṣ*、3rd. sg. aorist. P.）を例に具体的に説明しよう。

【*akoṣīt* の派生】

(1)		*kuṣ*			+ *lUṄ*	P.3.2.110
(2)	*aṬ*	+ *kuṣ*			+ *lUṄ*	P.6.4.71
(3)	*a*	+ *kuṣ*	+ *ClI*		+ *lUṄ*	P.3.1.43
(4)	*a*	+ *kuṣ*	+ *sIC*		+ *lUṄ*	P.3.1.44
(5)	*a*	+ *kuṣ*	+ *iṬ* + *sIC*		+ *lUṄ*	P.7.2.35
(6)	*a*	+ *koṣ*	+ *i* + *sIC*		+ *lUṄ*	P.7.3.86
(7)	*a*	+ *koṣ*	+ *i* + *sIC*		+ *tiP*	P.3.4.78
(8)	*a*	+ *koṣ*	+ *i* + *sIC*		+ *t*	P.3.4.100
(9)	*a*	+ *koṣ*	+ *i* + *sIC*	+ *īṬ* +	*t*	P.7.3.96
(10)	*a*	+ *koṣ*	+ *i*	+ *īṬ* +	*t*	P.8.2.28
(11)	*a*	+ *koṣ*	+ *ī*		+ *t*	P.6.1.101
	akoṣīt					

［派生説明］

(1) の段階で P.3.2.110 により動詞語根 *kṣu* に *lUṄ* が導入される。(2) の段階で P.6.4.71 により動詞語根 *kuṣ*に附加辞 *aṬ*が起こる。(3) の段階で *lUṄ* が後続しているので P.3.1.43 により動詞語根 *kuṣ*の後に *ClI* が起こる。(4) の段階で P.3.1.44 により *ClI* に *sIC* が代置される。(5) の段階で P.7.2.35 により *sIC* に附加辞 *iṬ*が起こる。(6) の段階で P.7.3.86 により *kuṣ*の *u* に「guṇa」が代置される。(7) の段階で P.3.4.78 により *lUṄ* に三人称単数「parasmaipada」の代置要素 *tiP* が代置される。(8) の段階で P.3.4.100 により *ti* の *i* が脱落する。(9) の段階で P.7.3.96 により *t* に

Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962-72.
PIŚ Nāgeśabhaṭṭa's *Paribhāṣenduśekhara*. See abhyankar 1962.
Pradīpa *Mahābhāṣyapradīpa*, a commentary on the *Mahābhāṣya*, by Kaiyaṭa: The *Mahābhāṣya*, 5vol. Edition published in Rohatak, 1962-63.
Vt: Kātyāyana's Vārttika. See MBh.

附加辞*iṬ*が起こる。(10) の段階で P.8.2.28 により *sIC* が脱落する。(11) の段階で P.6.1.101（vt. 5 on P.8.2.6）により *iṬ*と*iṬ*に*i*が唯一音代置され、*akoṣīt* が派生される。

なお、(11) の段階における P.8.2.28 による *sIC* 脱落後の P.6.1.101 による唯一音代置の適用は、vt. 5 on P.8.2.6: siclope ekādeśe（「*sIC* が脱落した後唯一音代置が適用されたとき［成立する］」）に基づく。

さてパーニニが P.7.2.7 に *ataḥ*（「*a* 音の代わりに」*at*, gen. sg.）を言及しなかったとしよう。*P.7.2.7 halāder laghoḥ は以下のように解釈されることになる。

> 「「parasmaipada」を後続する iṬで始まる *sIC* が後続するとき、*haL* で始まる「aṅga」の「laghu」に対する「vṛddhi」代置の禁止は任意である」

この場合、上の派生の (6) の段階で二つの操作が適用可能になる。すなわち、P.7.3.86 による *kuṣ*の *u* に対する「guṇa」代置と P.7.2.7 による *kuṣ*の *u* に対する任意な「vṛddhi」代置の禁止である。ここで、これら二つの操作のうち P.7.2.7 が適用されるとすれば、*kuṣ*の三人称単数アオリスト形として *akuṣīt* と *akauṣīt* という誤った語形が結果することになる。したがって、この場合、P.7.2.7 による任意な「vṛddhi」代置の禁止の適用は阻止されなければならない。

この阻止は antarańga 解釈規則を適用することによって可能である。P.7.3.86 による「guṇa」代置の根拠（aṅga）は *t* であり、P.7.2.7 による任意な「vṛddhi」代置禁止の根拠は *sIC* である。先に導入される要素である *t* を根拠とする P.7.3.86 による「guṇa」代置は、P.7.2.7 による任意な「vṛddhi」代置禁止に対して antarańga である。したがって、P.7.3.86 による「guṇa」代置が優先適用される。

以上のように P7.2.7 に *ataḥ*の言及がなかったとしても antarańga 解釈規則によって望ましい語形としての *akoṣīt* が派生可能である。

P.7.2.7 における *ataḥ*の言及の無意味性は回避されなければならない。*ataḥ*の言及は以下のことを示唆するために使用されている。

> 「*sIC* が後続するとき antarańga は起こらない」

このことは次のことを意味する。P.7.3.86 と*P.7.2.7 の間には一般規則と例外規則の関係が成立する。P.7.3.86 が一般規則、*P.7.2.7 が例外規則である。例外規則である*P.7.2.7 が規定する「laghu」である *kuṣ*の *u* に対する任意な「vṛddhi」代置の禁止は、一般規則である P.7.3.86 が規定する *kuṣ*の *u* に対する「guṇa」代置を阻止する。すなわち、antarańga 操作を阻止するのである。このことは、例外規則が規定する操作は antarańga 操作を阻止するということを意味する。したがって、P.7.3.86 と*P.7.2.7 の間に一般規則と例外規則の関係の成立しないように、*ataḥ*を言及することによって P.7.2.7 が定式化されたのである。

例外規則が規定する操作は antarańga 操作を阻止する。

Abhyankar K. V.
1960 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Pt. 2, edited and explained by Kierhorn F. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. (2nd. ed.)
1962 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Pt. 1, edited critically with the Commentary Tattvādarśa of MM. Vasudev Shastri Abhyankar. Poona: Bhandaarkar Oriental Research Institute. (2nd. ed.)
Bronkhorst, Johannes
1986 *Tradition and Argument in Classical Indian Linguistics: The Bahirańga-paribhāṣā in the Paribhāṣenduśekhara*. Dordrecht, Boston, Lancaster, Tokyo: D.Reidel Publishing Company.
Cardona, George
1970 "Some principles of Pāṇini's grammar," *Journal of Indian Philosophy* 1: 40–74.

【関連規則】

P.3.2.110 luṅ //（「過去に属する行為を表示する「dhātu」の後に *lUṄ* 接辞が起こる」）
P.6.4.71 luṅlaṅlṅkṣv aḍ udāttaḥ //（「*lUṄ*, *lAṄ*, *lṄ* が後続するとき、「aṅga」に附加辞 *aṬ*が起こり、その［*aṬ*］は「udātta」アクセントをとる」）
P.3.1.43 cli luṅi //（「*lUṄ* が後続するとき動詞語根の後に *ClI* 接辞が起こる」）
P.3.1.44 cleḥ sic //（「*ClI* の代わりに *sIC* という代置要素が起こる」）
P.7.2.35 ārdhadhātukasyeḍ valādeḥ //（「*vaL* で始まる「ārdhadhātuka」に附加辞 *iṬ*が起こる」）
P.7.3.86 pugantalaghūpadhasya ca //（「「sārvadhātuka」と「ardhadhātuka」が後続するとき *pUK* を最終要素として持つ「aṅga」と「upadhā」が「laghu」である「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」が起こる」）
P.3.4.78 tiptasjhisipthasthamibvasmastātāṃjhathāsāthāṃdhvamiḍvahimahiṅ //（「*L* 音の代わりに、*tiP*、*tas*、*jhi*、*siP*、*thas*、*tha*、*miP*、*vas*、*mas*、*ta*、*ātām*、*jha*、*thās*、*āthām*、*dhvam*、*iṬ*、*vahi*、*mahiṄ* という代置要素が起こる」）
P.3.4.100 itaś ca //（「*Ṅ* を「it」として持つ *L* 音と関係を持つものである *i* 音は必ず脱落する」）
P.7.3.96 astisico 'pṛkte //（「*asti* という「aṅga」と *sIC* を最終要素とする［「aṅga」］に後続する「apṛkta」である「sārvadhātuka」に附加辞*iṬ*が起こる」）
P.8.2.28 iṭa īṭi //（「*iṬ*が後続するとき *iṬ*の後続要素である *s* が脱落する」）
P.6.1.101 akaḥ savarṇe dīrghaḥ //（「*aK* に同類音である母音が後続するとき、先行要素の *aK* と後続要素の母音の代わりに「dīrgha」が唯一代置される」）
P.7.2.7 ato halāder laghoḥ //（「「parasmaipada」を後続する iṬで始まる *sIC* が後続するとき、*haL* で始まる「aṅga」の「laghu」である *a* に対する「vṛddhi」代置の禁止は任意である」）

1988 *Pāṇini: His Work and its Traditions.* Vol.1. Delhi: Motial Banarsidass Publishers

1989 "Pāṇinian studies," In *New Horizon of Research in Indology*, 49–84. Pune: University of Poona.

Kielhorn, L. F

1868 See Abhyankar 1962.

1874 See Abhyankar 1960.

間瀬　忍

2006 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究 (1)」（『比較論理学研究』第３号、pp. 89–99）

2007 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究 (2)」（『比較論理学研究』第４号、pp. 81–91）

2008 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究 (3)」（『比較論理学研究』第５号、pp. 107–116）

2009 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究 (4)」（『比較論理学研究』第６号、pp. 61–71）

（ませ　しのぶ、広島大学大学院［インド哲学］）